

高橋日銀総裁と高橋蔵相 — 金本位制と財政規律 —

麗澤大学 佐藤政則

本報告では、日露戦時から 1910 年代初頭における高橋日銀（副）総裁と 1930 年代前半の高橋蔵相という、いわば初めと終わりを交錯させることによって、高橋是清が果たした役割を考えたい。

第 1 に高橋は管理通貨制の信奉者ではない。1897 年の金本位制移行から関わった高橋は、外債募集に奮闘して金本位制を維持した。その高橋が皮肉にも最終的な離脱の実行者となった。「重金主義者」と言われたように、金本位制に対する高橋のこだわりは強い。もちろん、いわゆる自動調節作用を信じていたのではない。資金貸借の場としての国際金本位制が重要だったのであり、最終的な国際決済手段としての金 (Gold) が大事だったのである。その意味では、金輸出再禁止も、したがって「管理通貨制度」も Gold を温存する「一時の便法」だったのかもしれない。

第 2 に高橋財政を規律付けたのは「国債消化力」であった。日露戦時・戦後外債が募集できた前提は、日本が金本位制になっていたからである。同時に戦争拡大を抑止した要因の一つは金本位制の維持であった。つまり金本位制によって担保される日本外債の国際的「消化力」が日本の財政を規律付けたと言える。賢明な井上準之助は一言も語っていないが、井上蔵相の最後の 3 か月、その真の意図もここにあったと考えたい。

それでは高橋は何に拠って突出する軍事予算を抑制しようとしたのか。それが健全財政で担保される国債消化力である。もっともこの国債消化力の実態は危ういものであった。日銀売りオペの大口購入者は、国債シンジケート銀行（財閥銀行を中心とする東西の大銀行）であり、なかでも三井、三菱両行が全体のグリップを握っていた。しかも高橋は、投機以外の経済行動を「放任」している。したがって非常時の歳出であるにもかかわらず、肝心の歳入面は財閥銀行の投資余力とその意思に委託されているかのような姿を呈したのである。いわば非常時を平時で支えるものであり、日露戦争という戦時が欧米債券市場の平時で支えられたことを彷彿とさせる。2.26 事件の反乱将校は正確にここを突いたと言えよう。

第 3 に高橋の財政政策は「放漫財政」ではない。日露戦時・戦後の外債募集で苦勞する高橋は、財政の対外的信用を強固にするべきだと機会あるごとに建言している。さらに日銀総裁時には現状のままでは 4 ～ 5 年で正貨準備が枯渇するという危機的状況を迎える。高橋総裁がめざしたのは、迂遠であるが王道とも言える、輸出産業と輸入代替産業の育成である。これら産業の生産力を高めるために低金利を追求した。その反面で不要不急産業や投機への融資は断固排除しようとする。蔵相となってからはこの方向に磨きをかけており、ブレはない。産業を選択し区別しているのであるが、消費の減退を招くと増税も嫌がったことから、総じて「放漫」と映ったのであろう。さらに重要視されない産業に疎外感をもたせる政策志向であった。この点でも 2.26 事件の土壌をつくったと言えよう。